

海がある、わたしのまち



本市の南に広がる三河湾は、知多半島と渥美半島に囲まれた、波の穏やかな内湾です。この恵まれた海の環境を活かし、地域の文化や産業が育まれてきました。このまちには日常のすぐそばに海があります。今号では、そんな海と人との関わりを取り上げます。

シティセールス推進室 ☎ 66-1225

あやつき丸で漁業を営む浦田さん。西尾市出身で、漁師を始めて今年で10年目を迎えます。元々釣りが大好きで、以前は釣具店に勤めていたそうです。

「自分で事業をやりたいと思っていた時に市の新規漁業就業者支援事業を知って、これだ!と。」

そこから3年間の修業を経て独立し、現在は1人で操業しています。

浦田さんの漁法は「まんが漁」と呼ばれる伝統的な底引き網漁。潮の流れや海底の地形を読みながら、狙った魚を逃さずとらえるには、経験と勘が欠かせません。よく獲れるのは、ワタリガニやシャコ、エビ、貝など。「とれたてを刺身や塩ゆでで食べるのが1番おいしいですよ」と教えてくれました。

一方で、漁師の高齢化といった課題も感じており、「この10年で独立したのは、自分を含めてたった3人。3K(きつい・汚い・危険)って言われる仕事だから、好きじゃないと続けられない」と言います。



漁師 浦田圭太

今後は親子連れに人気の漁業体験にも力を入れ、海に触れる楽しさをもっと多くの人に伝えていきたいそうです。

「自然相手なので一筋縄ではいきなり。でもそこがおもしろいところなんです。毎日のように海に出ているけど飽きることはないですね」と笑い、今日もまた舵を握り、朝焼けの海へと出ていきます。

My town with the sea

海と暮らす

海とともにある暮らし。

海の近くで生きること。それは、ただ場所の話ではありません。ここに生きる理由があって、ここで続けたいと思える時間がある。蒲郡で暮らし、海を舞台に仕事をしている2人の移住者に話を聞きました。

西浦でサップ（スタンドアップパドル）のインストラクターをする山村さん。三重県出身で、20代の頃にカヤックのインストラクターを経験したことをきっかけに、趣味としてサップを始めました。職を転々とした時期もありましたが、「この環境やサップが好きだから続けられている」と話します。

山村さんは、サップを通じて人と海をつなぎ、さらに西浦という場所を通じて人と人をつなげたいと考えています。

「サップの魅力は、日々の喧騒から離れて、波や風を感じながら心をリセットできるところ。海の上で見るサンセットはとてもきれいですよ。」

以前、市内の子どもたちにアンケートをしたところ、約85%が蒲郡の海に入ったことがないと知りました。「海のないのに、海が近いだけの存在になってしまっている」と寂しく感じ、子どもたちの意識を変えていく必要があると思ったそうです。自身の生き方のコンセプトを「愛をもって地球と遊ぶ」

と語り、遊びや楽しさを通して海に親しむきっかけをつくることを目標にしています。

山村さんは、海と山とまちが調和するこの風景が大好きだと言います。

「波が少なくて穏やかな蒲郡の海は、パドルスポーツにぴったり。いつか西浦といえばパドルスポーツのまちって言われたらうれしいですね」と、未来へ夢を描いています。



サップインストラクター 山村佳史

海で学ぶ

海をもっと身近に、がまごおりならではの授業。

project 01

海の体験プロジェクト

サップやナミアート、ビーチクリーンを体験するプロジェクトです。実際に海に入ること、海で遊ぶことの少ない子どもたちに海の魅力を伝えます。



project 02

海のそなえプロジェクト

水難事故から身を守るためのプロジェクトです。ライフジャケットの使い方や泳ぎ方など、水辺の安全に関する知識と対策を実践で学びます。

まずは
ライフジャケットを着用!

海の護身術

もし海や川に落ちてしまったら

- パニックにならずに落ち着く
- 浮き身で呼吸を確保する
- 流れに逆らわない



おすすめの浮き身「イカ泳ぎ」

- ①手足を使ってお腹を上
上に顔を上げる



- ③手と足でゆっくり
あおる

- ④イカのようにゆっくり
進む(浮き続ける)



実は蒲郡って海のまちって言われてるのに、海で遊んだことのない子が多いんですよ。魚もあまり食べない子が増えていて。だから、海があるからできること、海が近いからこそ感じられる暮らしを、子どもた

地元の子どもたちにもっと海に親しんでもらいたいと思い、日本財団の助成を受けて「海と日本プロジェクト 海みなと蒲郡」を平成28年から始めました。学校と連携して、海に入ったり、魚をさばいたり、水辺の安全を学んだり、体験型の授業を行っています。



一般社団法人海みなと蒲郡
代表理事 小田泰久



project 03

陸養プロジェクト

「陸養」は、子どもたちが海の魚について、学んで、悩んで、育てる陸上養殖体験です。自分たちでヒラメを育て、育てたヒラメを最終的に食べるのか、それとも他の選択をするのか、リアルな体験を通して、海の恵みと命の大切さを考えます。

project 04

さばけるプロジェクト

地元の魚や未利用魚、とった後の過程について知るとともに、実際に魚をさばき、海の恵みを学びます。



講師 笹野弘明

interview

きっかけは息子の友達との会話でした。蒲郡でとれる魚を尋ねてみたら答えられず、知っている魚はマグロとサーモンだけ。蒲郡には多様な漁場があって約300種類のおいしい魚がとれるのに、地元の子どもたちがそれを知らないなんて。魚をきっかけに海や蒲郡のことを知ってほしいと思って始めました。

最近は「蒲郡の魚は何か知ってる？」って聞くと、「メヒカリ」「ニギス」って答えてくれる子が増え、変化を感じています。今の子どもは魚が嫌いじゃなくて、食べる機会が少ないとか食べ方が分からないだけ。海が近くにあっても、触れ合う機会がなければ意識は向きません。だからこそ、こういう体験が大事だと思っています。

ちに知ってほしいなと思ってます。

授業の中では、本物と出会うことを大事にしています。海に入って「本当にしょっぱい！」って驚いたり、魚をさばく授業で「怖くて触れない」って言っていた子が、最後には自分の手でちゃんとさばけるようになったり。そういう姿を見ると、やっぱり体験って大事だなって実感しますね。

協力してくれる人も年々増えていて、活動の幅も広がってきました。市外にも広がっていったらいいなと思っていますし、こういう授業をもっと多くの子どもたちに届けられたらうれしいです。

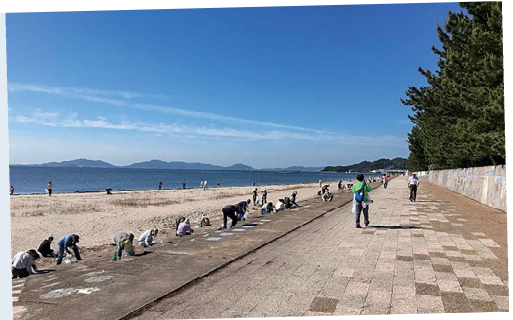
子どもたちが地元の海を知って、好きになってくれる。そういう積み重ねが、未来のまちづくりにつながっていくんじゃないかなって思っています。

海を守る

この海を、未来につなぐために。

私たちは普段、海から多くの恵みを受けています。また、海はさまざま生き物たちが暮らしている大切な場所でもあります。だからこそ、私たちがこれからも海を身近に感じ、未来の世代にその恵みを受け継いでいけるように、海を守っていくことが大切です。

しかし、海岸にはたくさんのごみが流れ着き、問題になっています。そこで年2回行っているのが、海岸を中心に市内5カ所の清掃を行うクリーンキャンペーンです。530運動加入団体や地元団体の協力のもと、年間約1,300人が参加します。



また、そこで集められたごみや流木などの海岸漂着物を市で回収しています。回収量は年間約30トン。これでもまだ回収は追いついていません。

海を守るための取り組みは他にも

三河湾環境チャレンジ

三河湾への理解を深めるため、干潟での生き物の観察を市内の全小学校で行っています。



がまごおりの里海再生プロジェクト

海をきれいにし、生き物を守り育てる海草「アマモ」の保全や砂の移動防止対策、海底の耕うんを行っています。

市民の皆さんによる活動



蒲郡ビーチクリーン

海に行ったとき、ごみがすごく気になったんですよ。でも、1人で拾うのってやっぱり難しくて。だったら、自分たちで拾いやすい環境をつくってみようかなって思ったのがきっかけです。

令和3年に始めたこの活動は、私たち4人を中心に月1回ペースで続けています。場所は主に西浦エリア。1回で20袋くらいごみが集まります。普段は20~30人くらいで活動していますが、飛び入りで参加してくれる方も時々いるんですよ。

それぞれはじまりのきっかけは少しずつ違っていて。「料理教室をやっていて、魚のマイクロプラスチック汚染が気になって」っていう人もいれば、「他市ではビーチクリーンをやっているのに、蒲郡にはなかったから、自分たちでやろうと思った」って人もいて。そんな小さな気づきが重なって、今の形になりました。

『きれいな海を、子どもたちに残したい』

活動を通じて知ったのは、海に落ちているごみのほとんどが、実は海から出たものじゃないってこと。海岸にあるごみの8割は、道路やまちの中から流れてきたものなんです。だから、ごみを拾うことも大切だけど、それ以前に“ごみを出さない暮らし”がもっと大事なんですよ。

ぜひ一度海に来て、どんなごみがあるか見てほしいです。実際に見ると、ものを大事に使うとかなるべくごみを減らそうっていう意識が自然に生まれてくると思います。海に落ちてるのって、ごみだけじゃない。海の現状を自分の目で見て、何かに気づいたり、行動のきっかけになったらうれしいですね。



世界で起きている 「海洋プラスチック」の問題

生活のあらゆる場面で利用されているプラスチック。多くのプラスチックは使い捨てられ、利用後きちんと処理されずに、最終的に海にたどり着きます。この海洋プラスチックが今、世界中の海を汚染し、生き物たちに深刻な影響を与えています。

美しい海を未来につなぐためには、1人ひとりの意識と行動が欠かせません。例えば、プラスチック製品の使用の見直しや、マイバッグやマイボトルを持ち歩いたり、ごみの分別を徹底したり身近なところから海を守る第一歩が始まります。自分ができることから取り組んでみませんか。

